

# 胃がんは「絶滅危惧種」

## がん社会 を診る

中川 恵一

発生していませんでした。ピロリ菌感染にストレスが加わって、胃潰瘍のリスクが高まったのです。

胃がんの原因のほとんどもピロリ菌の感染です。世界保健機関（WHO）もピロリ菌感染をたばこやアスベストと同じ、最高の危険度の「グループ1」に指定しています。

胃がん患者のほとんどがピロリ菌に感染していますが、ピロリ菌の感染者のうち胃がんになる人は1%以下。ピロ

リ菌に感染しても胃がんになるわけではありません。現に、ネズミにピロリ菌を感染させても、1匹も胃がんにはなりませんでした。しかし、ピロリ菌を感染させたネズミに、多量の塩分を与えたところ、胃がんが頻発したのです。

つまり、ピロリ菌に感染している人が、塩分過多になると、胃粘膜の炎症が進み、胃がんを発症しやすくなるということです。

実際、胃がんの患者は、塩分摂取量の多い東北地方に多い傾向があります。胃がんによる死亡率が一番高いのは秋田県で、青森県、山形県が続きます。逆に塩分摂取量が全国一少ない沖縄県では、胃がんによる死亡も最低です。

ピロリ菌感染にストレスが加わると胃潰瘍に、塩分が加わると胃がんになりやすいというわけです。

さて、胃がんの罹患（り）かん率、死亡率が急激に低下しています。これはピロリ菌の感染率の低下が主因です。

かつて、人類のピロリ菌感染率はほとんど100%で、部位別でも、胃がんは最近まで、トップでした。

今アメリカでは胃がんは、白血病や膵臓（すいぞう）がんよりめずらしい「希少がん」になっています。しかし、1940年代まではかつての日本と同様に、がんのトップでした。日本より早く水道や冷蔵庫が普及して、ピロリ菌感染率が下がり、劇的に減ったのです。

日本でもピロリ菌感染は激減していますが、今でも、80歳以上の感染率は8割近くあります。しかし60代では5割、50代でも4割程度と低下し、20・30代では1割、10代では5%程度にすぎません。

胃がんは絶滅危惧種で、大腸がんはトップ。がんは社会とともに変化していきます。

（東京大学特任教授）

長引くコロナ禍でストレスがたまっている方も多いはず。かつて、このストレスが胃潰瘍の原因と言われた時代がありました。しかし、ストレスだけでは胃潰瘍はまず発症しません。

27年前の阪神大震災の直後、胃潰瘍の患者が増えました。避難生活のストレスが原因と考えられましたが、患者の8割以上がヘリコバクター・ピロリ菌の感染者でした。

逆に、ピロリ菌に感染していない人にはほとんど胃潰瘍は



イラスト 中村 久美